

# つかみ所がないと考えていた幼児との プレイセラピー

— ピノッキオを援用した精神分析的考察 —

伊 崎 純 子<sup>1</sup>

## 問題

臨床心理士として駆け出しの頃、児童相談所にて非常勤心理判定員（現在の児童心理司）として勤務し、研鑽を積んでいた。筆者にとって児童相談所は実践の場でありながら、心理検査やケース報告の基本を先輩から学ぶ場でもあった。当時のケース報告を見返すと、今の自分ならばしないと思う不適切な行動をしており、それを正直に報告していたことにも驚く。何が大切なのか当時は見えないまま、日々出会うクライアントを前に、自分の直感を頼りに応答していた。

現在でも残念なことに、頭では理解しているようで、実際に臨床で体験できない知見がたくさんある。プレイセラピーはアクスラインの原則をあげるまでもなく、クライアントが「生きる」ための時間であるが、現実原則をつきつける役割を優先しがちな態度は私の癖のようである（福田, 2017; 伊崎, 2017）。

本稿では初心時の自験例を筆者のバックボーンでもある精神分析的観点から再検討した結果を報告することを目的とする。

---

<sup>1</sup>白鷗大学教育学部  
e-mail : juniza@fc.hakuoh.ac.jp

## 方法

事例の概要については当時のカンファレンス資料をそのまま記載する。直後に字体を変えて、現在の筆者の理解を併記する。ここで取り上げる事例の面接経過は全13回（X年12月～X+1年6月）であり、転居に伴い中断したケースである。面接経過はキーワードとエピソードをもとに要点にまとめる。

事例の概要 ＊〈〉は筆者の発話、「」は対象児の発話。（#○）は面接回数。

対象児（以下Cl）：Kくん（来談時5歳7ヶ月）幼稚園年長

主訴：友達ができない。落ち着きがない。問題行動（マンションの上から壊れた一輪車の部品を落とした）。

明らかに母親の主訴であり、本児の主訴ではない。〈一緒に遊ぼうか〉と面接を開始し、Cl自身は何に困っているのか、なぜ児童相談所に通所することになったと考えているのかに関して筆者（以下Th.）は問うことがなかった。Th.は#1の所感として「もうしばらく様子をみないと何が問題なのか分からない」と記している。Clを借りてきた猫のようだと捉え、本心・本性は表現されていないと考えていたのだろう。Clなりの児童相談所に通う意味理解を尋ねることがあっても良かったのではないだろうか。また、この“捉えどころのなさ”という印象自体が本児の特徴だったのかもしれない。

生育歴：妊娠・出産時に特に異常なし。出生時体重3200グラム。首のすわり3ヶ月、一人歩き11ヶ月、発語の時期は不明だが、1歳半で単語2～3個。

衝動コントロールに関する主訴を知った上でトイレトレーニングに対する記載がない。後日本児に対して懸念される叱る・叱られる関係性、あるいは行動のコントロールに対する課題があるという時点でトイレト

トレーニング時の母子関係の有り様が今後の見通しに資する点に思い至らずに流してしまっている。

家族構成：会社員の父（40歳）、専業主婦の母（29歳）、姉（8歳）、妹（10か月）の5人家族。

姉や妹との違いを母はどのように感じているのか、男同士の関係にある父親は母親の主訴をどのように感じているのか記載がなく見落とされている。最後まで父親や年齢差のある母親に触れる記載がない点も特徴的である。

母親担当セラピストによる初回面接および今後の方針：

田中ビネー知能検査実施 IQ=107

ものを落としたのは一度だけのエピソード。むしろCl.の社会的な経験不足と妹の出生に伴う、一時的な退行、そしてマイペースが気になる。隔週で、プレイセラピーを通してCl.には「男の子らしさ」を十分に表現させていくことを目指す。

筆者自身のCl.と行うプレイセラピーに対する理解が乏しかった。母親担当者はすでに周囲への思いやりを妨げるほどの、社会的経験不足からくる“好奇心”の優位性や適度な“男の子らしさ”の表現を目的に掲げているが、筆者には伝わりきれていない。筆者自身の考える“男の子らしさ”が曖昧だったこともプレイセラピーの展開を阻害する要因となった。

## 面接の要点

### 1) 心的距離感、すり抜ける感じ

【エピソード①】 母、妹、Cl.の3人で来所。妹をあやし、挨拶時に心的距離を感じて遊びに乗ってくるか不安に思うが、〈一緒に遊ぼうか〉に「うん」と素直に応じる。（＃1）

【エピソード②】 和室と箱庭の部屋を選んでもらう。和室にもずっと靴を脱ごうとするなど警戒心はなかったが、箱庭の部屋に入るとすぐにミニカーに興味をもち、〈どっちの部屋がいい?〉と言う声も聞こえない様子。

(#2)

最初から、初めての場所、初めて出会う人物に対する慎重さの欠如がみられる。筆者は違和感をもちながらも本児の“素直さ”の現れとして書き出している。母親との別れる瞬間の様子が記載から落ちている点が悔やまれる。警戒心のなさと待てずに遊び始める様子は2回目のプレイセラピーの時にもみられた。“好奇心”が危険回避を上回っている様子が散見される。それに対してCl.の動きを包むような環境を提供する意識に欠けるTh.は巻き込まれ、右往左往し、妹には自然に対面する一方でCl.の思いを汲むことなく彼の行動を外から傍観している。

【エピソード③】 電灯のスイッチを探すTh.には目もくれずに『黒ひげ危機一髪』を棚から降ろす。1本しか入っていないナイフを「これしかない」と驚いてTh.に見せるCl.に距離が近づいたと感じる。ナイフ探しから、『プラレール』に興味に移る。レールをつなげながら突然「今日ね、バスに乗ってね、それからタクシーで来たんだよ」〈そう、おうち遠いの?〉「…」顔をあげずに「今日金曜日、幼稚園、ぼくだけお休み」〈特別なんだね〉立ち上がって「～（よく聞き取れない）行くから、赤い（?）お手紙先生にわたしてね、ぼくだけ休みなの。～しないと、先生からおこられるの」〈（?）先生こわいの?〉「…」そのまま無言でレールをつなぐ。（#1）

Cl.がみせた新奇な場や人に対する警戒心のなさが基本的信頼感に起因するのであれば、このような本児の一方的な情報提供とTh.の応答のズレは生じなかったのではないだろうか。Th.が合いの手をうつたびに無言でCl.は答えている。Th.はそれに気づかずに、うまく話を展開できないことに困惑している。困惑するTh.に対し、「タラリーン、鼻から牛乳♪」と小声でつぶやき、姉から教えてもらったこと、Th.と話題を共有することで会話がつ

ながら始める。

【エピソード④】 終了の時間が近づき今日のまとめをするつもりで、レールを全部つなぎ列車を走らせることをTh.から提案。Th.がレールの上に列車を乗せると「まだ」と最後までレールをつなげたがる。Cl.は列車の走のを見るよりも脱線した列車を直したり、レールのつなぎ直したりに一生懸命。片づけを促すTh.に踏切のつくりやベルが鳴る仕組みが気になり確認してTh.に見せに来るCl.。Mo.もこういう時はイライラするかなと思いながら〈ほんとだ一、すごいね一〉と答える。最後はレールを箱の上で叩き壊し、Cl.は片づけを手伝っている。(＃ 1)

【エピソード⑤】 箱庭の部屋でミニカーに興味を持ち、車輪が壊れていないことを基準にミニカーを選ぶ。Th.が選んだミニチュアは横に置き、「僕が(遊ぶおもちゃを)選んでいいんでしょう？」と聞く。(＃ 2)

まとめたい、片づけたい、箱庭をやりたいのは明らかにTh.の欲求であり、現実原則を盾にCl.の気持ちを汲もうという態度が欠如していると言わざるを得ない。〈ほんとだ一、すごいね一〉は心からの賛辞ではない。レールを叩き壊す様は「父なるもの」(河合, 1994) の体現だろうか。河合(1994)によれば、父なるものは、切断の機能をもち物事を分割、分離し、秩序と規範性の遂行者としての権威を持つという。Cl.は力があり、Th.を代表する大人に合わせたり、場に適した自己主張をしたりしている。

## 2) 「男性性」を封じ込めるもの

【エピソード⑥】 プレイルームの大きな鏡の前で口を一字にする。ピストルで遊んでいると「あのね、夜中の3時になるとね…」と言いよどむ。お化け物かなと察しがついたので、〈電話が鳴る？〉などふざけて応じると、自宅にある大きな鏡が自室にあり、夜中にお化けがうつることを教え

てくれる。〈そう、怖いね〉「それとね、ちんちん触るとちんちんきられちゃうの」〈誰に習ったの?〉「お母さん」〈怖いね〉（＃2）

【エピソード⑦】 スイッチのあるおもちゃばかりに興味を持ち、スイッチに伴う変化や動きを確認してはTh.に見せに来る。〈ほんとだ〉「ねー」。偶然「チーン」と音が鳴るとびくっと体を震わせて振り向き「チーンってなったらね、お化けが出るんだよ」（＃3）

【エピソード⑧】 先に玄関に向かい、自動ドアで遊ぶCl.を後ろから制止するように抱えると、Th.の顔を遠慮がちにこぶしで叩いてくる。〈殴ってもダメなものはダメ〉と言うと、抱えられたまま壁を蹴って登ろうとし、遊びになっていく。（＃4）その後も、終わりの時間が近づき、片づけを促すと部屋から飛び出し、追いかけるTh.へ砂をかけようか逡巡したり、床に寝転んで逃げようとしたり攻防が続く。（＃5～8）

【エピソード⑨】 はしゃいだCl.が転がっていた太鼓のスティックをぶんぶん振り始める。危険を感じ〈投げちゃだめだよ〉といったのをきいて、振り投げてしまう。〈こら！投げちゃダメって言ったでしょ！〉ともう一つのスティックをもってTh.がCl.を追いかける。「ごめんなさい」というCl.を追いかけるうちに立ち止まって「ワーン」と泣き始める。大粒の涙がポロポロこぼれるのを見ながら泣かせるまで怒るつもりはなかったと思う。投げないようにいったにもかかわらず投げたから怒ったことを説明すると我慢するように泣き止む。また少し遊んで片づける段になってふざけたCl.に対し、とっさにTh.がお尻を叩いたことによって再び泣き出し、Th.の膝に突っ伏して泣く。そこへ母が「帰るよ」と声をかけたとき、声をはりあげて泣き続ける。Th.は母や母担当のセラピストは帰りたくないと言っているのに勘違いしているのではないかと考えている。（＃13）

2回の時点で、母の育児不安のために面接が続くこと、Th.は疲労感を

感じつつもCl.に対しては“うまくのせながら”時間いっぱい、にぎやかに遊ぶことという目標を立てている。棒を振り回すCl.に注意し、Cl.が棒を投げた時、Th.はとっさに、Cl.と同じ棒を振り回して彼を追い回した。なぜ、投げてしまったのか洞察させるせっかくの機会をつぶしてしまった。プレイで再現する力をCl.は持っていたのだが、うまく拾い上げることができなかった。Th.は母に肩入れしCl.を置き去りにしている。そしてTh.は自分の行動の意味が理解できず途方に暮れている。

### 3) 終結に向けての作業

【エピソード⑩】 遊び途中で「疲れた」と言葉にするたびに遊んでいたおもちゃを片付ける。〈片づけるんだ、偉いね〉「だって5歳だもん」(#3)

【エピソード⑪】 8月に市外に転居するため、利用者の居住地が限定される現在の職場での面接の継続が難しいことが分かった時に、パッと「終結にもっていかなきゃ」と口にしてしまい、他の職場で継続する方法もあったものにも関わらず、真っ先に終結を考えた自分が恥ずかしくなった。( #13)

早い段階からTh.は、本事例は母の育児不安のための面接であり、Cl.のプレイセラピーは「おまけ」として位置付けてしまった。母や幼稚園の先生と一緒にCl.の行動を監視し、粹に収めようと必死になっていたように思われる。大人にとって都合の良い子に方向付けようと、「片付ける」Cl.を褒め、さらに思うように収まらないことから抱える環境としての面接を放棄しようとしている。母親担当者のCl.の理解がTh.になかなか伝わらず進展は少なかったが、Cl.の力でセラピーの中で“男の子らしさ”の表現は出来つつあった。外的には児童相談所の限界から市外転居に伴う中断となったが、内的にも少なくともこの段階ではTh.側の能力不足からCl.の“男の子らしさ”を受け止める力は弱かったと考えられ、悪い対応を重ねずに中断したのは順当な結末だったと思われる。

## 考察

### ① 治療構造とケース報告の主旨

本報告は、児童相談所のケースを児童相談所内のカンファレンスで報告したものであるため、治療構造の記載は省略されている。このケースは母親の育児不安を主訴とした養育相談だった。隔週面接を行い、母親担当のベテラン臨床心理士と、子ども担当の筆者で対応した。母親担当者が主に情報収集と母親のカウンセリングを行っていた。筆者と母親担当者は対等な関係性とはいえず、筆者はCI.担当としての認識よりも、母親がカウンセリングの間の子守りの感覚や面接時においても独立することなく母親担当者をスーパーバイザーとして捉える気持ちが強かった。CI.の転居に伴い即座に筆者が下した終結判断や終了時の満足感の少なさは、筆者のCI.理解が乏しかったことに起因している。

ケースを報告する目的も初心者のTh.が、自分の戸惑いや困惑についてケース報告することでどうしたらよかったのか聞きたいという筆者の意図が前面に出ている。そのために、あったこと、気づいたことを正直に語ろうとし、自身の感想は豊かに記載していた。しかしながら、肝心のCI.はどのように感じ、考え、行動したのかにかかわる記載が少ない。振り返ってみると、面接時でさえも母親担当者を何うように筆者自身の面接者としての行動を気にしていたように思う。

母親担当者が具体的に筆者に行動を指示したような記載はなく、記憶にもない。「良いセラピスト」でありたいという当時の筆者の思いはCI.の評価ではなく母親担当者の評価に依存していたのではないだろうか。CI.も筆者も一生懸命に遊んでいたが、そもそも遊びに必死さがあるのがおかしい。遊びは余裕やゆとりをもたらしものである。同じ初心者であっても男性治療者がCI.の担当だったらもっと違ったのかかもしれない。並行して、母親も父親の出番だと考えていたのかかもしれない。実際には現実的な父親ではなくCI.は空想のお化けに怯え、機械仕掛けや現実の仕組みに夢中になることで気を紛らせていた。



## ② 第一印象に対する理解

筆者はCl.の印象を「すっとぼけたピノキオ」と評している。この直感的を射ていたと現時点でも評価できる。「すっとぼけた」という形容詞は原作でピノッキオが嘘をつく様を想起させる（カルロ, 1883）。ピノッキオは周囲の心配をよそに甘い言葉に心惹かれ、周囲の心配を嘘でかわそうとするために鼻が伸び、大人に、人間になることができない。Cl.は嘘をついたというエピソードはないものの壊れた一輪車の部品をマンションから落とした理由を語ることはなく、内心では去勢不安とつながる空想のお化けに怯え、機械仕掛けや現実の仕組みに夢中になって不安を紛らせているのだが、そのつながりが分かりづらいために「本心がわからない」「つかみどころがない」Cl.印象に結びついたと考えられる。

ピノッキオは元々木切れから創られた操り人形であった。それも喋る木片である。Cl.も初めてやってきた児童相談所で遊ぼうと誘うTh.を拒まず、自ら積極的に話しかけている。物語では真面目に勉強し人間になりたいと思う一方で、つい怠けや遊びへの誘いに流されやすいピノッキオは創り手であるジェppet爺さんやコオロギの忠告を聞かず、危ないことを繰り返して経験する。Cl.も創り手である母親の言うことを聞かずに幼稚園や家庭で叱られるような行動を繰り返している。ジェppet爺さんがピノッキオを探しているように、母もCl.の本心を探しに児童相談所を訪れた。しかし、残念なことに、この児童相談所で担当した筆者は中途半端なサメやコオロギに過ぎずピノッキオを助けるマグロになることなく、ピノッキオの物語でジェppet爺さんがピノッキオとであったように母と子の心の出会いを創出することもできなかった。もしも筆者が、青い瞳の妖精のようにCl.を「良い子」にできたり、あるいはせめてサメのお腹のようにCl.の“好奇心”や内省を包み込むような場を提供したりできたならば違った展開があったのではないかと思われる。現実には物語の筋書きをなぞるものではないが、そのようなCl.の期待や願望を理解する姿勢は少なくとも必要だっ

た。

### ③ 転移と逆転移

叱ることで筆者が得たかったものは、叱ることで泣く（実態・実感を伴う）筆者の関わりを受け止めた主体としてのCl.との出会いだったのかもしれない。それは、母との関係の再現でもあり、母親転移があったと考えられる。つかみどころがないと感じさせるCl.と筆者が繋がったと思われるタイミングは、話題や感情を共有し、かつ身体接触が濃厚な時であった。妹の誕生に伴う一時的な退行、「ちっちゃくてかわいい」赤ちゃんへの回帰と成長の過程で必要となった“男性性”への方向づけはCl.の中で相反しており、Cl.も困っていたのではないだろう。

“男性性”に関して本事例では父親に関する情報がほとんどないことも特筆に値する。母親は自分と同性である姉、妹と異なる対応を要求する男児としてのCl.の行動や意図をつかめずにより、育てにくさを感じていたと想像される。ピノッキオの物語は、前述した妖精以外、全て男性のキャラクターである。言葉を操る木切れに驚き気絶する大工のさくらんぼ親方、ピノッキオのために尽くすジェppetto爺さんは、男性性の放任主義的な側面と優しさがあるように感じられるがなかなかピノッキオの更生には繋がらない。コオロギはピノッキオの超自我であろうが、あまりに小さく弱い存在である。火喰い親方が愛情を金貨で与えたことがきっかけで、ピノッキオは代表的な悪役である足の悪い狐と目が見えない猫に騙されて殺されかける。このように賢く、ずるく、怠惰で快楽を求め、いたずらや冒険を楽しむ、多彩な男性の中でもまれながら「人間になりたい」という目的をもち、ピノッキオがかわいそうなお爺さんのために反省を繰り返したように、Cl.も母の思いに沿って自己コントロールできるようになることがCl.の課題だったのかもしれない。

本事例では筆者が“男の子らしさ”を受け止めきれずにいるが、他の事例では枠を壊すようなエネルギーを受容できたこともある。後者の事例を

担当する頃にはいくらか筆者がセラピーに対する経験や知識が備わったことも一因であろう。一方で、筆者が本事例で無意識に叱ったことは逆転移として考えることもできる。Th.自身、女・女・男の3人姉弟の長子であり、監視役としてふざける弟を諫め、強くたくましい男性性ではなく去勢された優しさを弟に求めた経験がある。姉としての自分が面接場面に出現していたのかもしれない、反省すべき点の多い事例であった。今ならば、Cl.の興味関心に寄り添い、プレイルームという枠の中での表現を尊重し、枠の内と外を使いCl.の心の内と外、心と行動のつながりを理解できる支援に努めることができそうな気がする。Cl.がその後、どのような成長を遂げたのか知る由も無いが、愛情深い母の不安が穏やかなものとなり、やがて登場するであろう父や友人、男性教師などとともに社会で自分らしくいられる居場所を見出していることを強く願う。

## 引用文献

- 福田恵美子 (2017). ゆっくり発達している子どもが輝く遊びの処方箋. CBR, p.24
- 伊崎純子 (2017). 北山先生への感謝, 白鷗大学教育学部論集, 11(2)
- 河合隼雄 (1994). 昔話の深層—ユング心理学とグリム童話—, 講談社+α文庫, p.196
- Carlo Collodi (2002). Le Avventure di Pinocchio, Mondadori (ペーパーバック版, 1883) (カルロ・コッローディ 大岡玲訳 (2016). ピノッキオの冒険, 光文社古典新訳文庫)